

# 我が街の記念碑

## 鈴ヶ森刑場跡

京浜急行 大森海岸駅 徒歩 8分



火あぶりや磔の台などが実際に置かれている



や浄瑠璃、講談の演目に使われて、五右衛門風呂とともにその名も知れ渡ることになりました。

時を経て犯罪者の処刑には変遷がありました。

【品川・大工・岩崎一宇美通信員】遙か昔の安土桃山時代に、「石川や浜の真砂は尽きるも世に盗人の種子は尽くまで」という辞世を囁(ささ)き、1594年に市中

## 江戸3大刑場として 10万単位の罪人が処刑に

大刑場と言われました。刑場はいずれも主要な街道の入り口で犯罪抑止の見せしめの効果がありました。鈴ヶ森刑場は、当初、港区

大木戸の芝高輪刑場と札の辻刑場が手狭になり、1651年に鈴ヶ森に移設され、1870年に閉鎖されるまで、219年間に10万とも20万人とも言われる罪人が処刑されたということです。

石川五右衛門は釜で死したが、鈴ヶ森の刑罰は磔(はりつけ)火あぶり、斬首して首をさらす等でした。首を洗った井戸、火あぶりの用鉄柱、磔用の柱を立てた礎石などが都の史跡として現地に残されています。

当時は死骸に群がる野犬、カラスなどを避けて、江戸に入る者は青物横丁から池上通りに出て、南品川から高輪に抜ける道を選びました。現在、日蓮宗の鈴森山大経寺がこの地にあり、寺は刑場廃止に伴い、檀家を持たずに遺跡の維持と共に無縁受刑者の供養をしています。

今から58年前の1964年、第18回東京五輪大会が開かれた当時、私はボイスカウトに所属しており、五輪の参加国の国旗掲揚の任務を命じられました。開会式の3カ月前の7月下旬、東部練馬にある自衛



測量 中村文康

## 国旗の掲揚を任せられた

### 1964東京五輪



## 九死に一生

過激パフォーマンクス集団「電撃ネットワーク」の南

部虎弾は、かつてTVの企画で金魚を飲み込んで吐き出す「人間ポンプおじさん」にチャレンジすることに。その芸風から「金魚なんかじゃダメでしょ」ということで「フニア」で挑戦するも、胃の中で「フニア」に嘔みつかれ激痛に襲われる。我慢してビールを飲んでいたら、あまりの苦しさにトイレに行く、真っ赤な血に染まった「フニア」がパージと出てきたという。

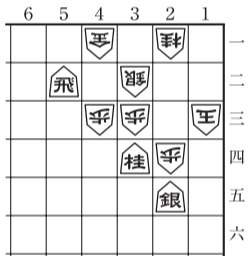
## 忘れえぬヒト

しています。

五輪の14日間は国立競技場をはじめ、駒沢公園、絵画館前、馬事公苑、代々木五輪プール、後楽園など、様々な会場で朝8時に掲揚を行ない、午後5時に降納するという、かなり大変な毎日でしたが、充実した2週間でありました。おかげで、男子走り高跳びのブルメル(当時のソ連)と米国のトーマスとの死闘や、マランソンのアベベを目の前で見ることができましたし、国立競技場のメインホールに揚がったエチオピアの国旗と3位に入った円谷選手の日丸が夕日に映えて輝いていた光景は、いまでも目に焼き付いています。

コロナ禍で1年延びたとはいえ、昨年、2度目の東京五輪が開かれ、改めて若かりし頃の思い出がよみがえってきた次第です。(中野)

## 詰将棋



## チヨット一服(1058)

平成と令和でラフソングの歌詞に違いがみられるという。平成は、「君と好きな人が百年続きますように」(ハナミズキ)、「ユアアエブリシング(君がすべて)」(Everything)など、愛の永遠を願い、ドラマティックに歌い上げる。令和は、「君の運命のヒトは僕じゃない」(Pretender)、「時間が経てばきこ色あせる」(ドライフラワー)など、恋愛をヒューなものであるとして美化せず、永遠なものもない、という感覚のようだ。震災、コロナの影響もあるのかも。歌詞への共感がなければヒット曲にはならない。こんなところにも、今の息苦しさが見て取れる。



## 手塚マンガの共生する社会



以前も紹介したことのある「手塚マンガで(の)シリーズ」の最新刊。アトムやブラックジャックをはじめ、7編の漫画とそれに呼応するエッセイで構成されている。

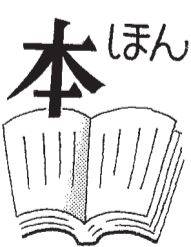
手塚マンガの特徴の一つとして、悪が完全な悪ではなく、人間臭く、それぞれがグラデーションで描かれる、とてもおもしろい、そんな特徴があるのではないかと思う。今回でいうと「空気の底」ジョーを訪れた男」に登場するウイリー・オハラ大尉がそれにあたる。黒人を激しく蔑視する誇り高き南部の白人、ウイリー。相手をとことん見下し、その意識を隠そうともしない言動は、当時の黒人差別の激しさを、根深く感じさせる。しかし、最後の瞬間、ウイリー

## 手塚マンガの共生する社会

手塚 治虫 野上 暁 解説

### 人間たる所以描く天才の奥深さ

「さらばアトリー」や「奇動館」など興味深いストーリーばかりで、まさに珠玉の7編といえる。こういう形でなければ出会えなかったかもしれない手塚作品たちだ。これらに田中優子、雨宮処凛、前川喜平など、組合運動の中でも馴染みある筆者たちがエッセイで現代風に読み解く。手塚治虫の先見性や奥深さに、あらためて感動させられる。(子どもの未来社・本体1500円十税)



ほん 本